二〇二一年度　桐朋女子中学校入学試験　（B入試）

筆記試験（国語）

受験番号

氏　名

【注意】

一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。

二、問題冊子は1ページから20ページまであります。

三、「はじめてください」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。

四、答えはすべて解答用紙に書きなさい。

五、問題冊子に書きこみをしてもかまいません。

六、「やめてください」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙も問題冊子も表を上にして、机の上におきなさい。

七、試験時間は四五分間です。

一、次の①～⑩の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。また、⑪～⑮の――線部の読みをひらがなで答えなさい。

① 将来はカンゴ師になる
② セイケツに部屋を保つ
③ 飛行機のリンジ便に乗る
④ ケワしい山道を歩く
⑤ ウチュウ開発を進める
⑥ 駅のコウナイで弁当を買う
⑦ ネギをキザむ
⑧ なつかしのコキョウに帰る
⑨ 薬のフクサヨウを調べる
⑩ セーターをアむ
⑪ 警笛を鳴らす
⑫ ルールを刷新する
⑬ 障子が破れる
⑭ 事件を公正に裁く
⑮ 諸国の名産品を味わう

二、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) ①・②の尊敬語とけんじょう語をそれぞれ一語で答えなさい。ただし、ひらがな、漢字のどちらで答えてもよいものとします。

① 言う　② 食べる

(2) ①～③がそれぞれ慣用表現になるよう、□に当てはまる動物を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。また、その慣用表現が表す意味をそれぞれ形容詞（『高い』など、末尾が『～い』の形で終わるもの）で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。また、形容詞はひらがな、漢字のどちらで答えてもよいものとします。

① □の涙（なみだ）　② □の額　③ □の歩み

ア 馬　イ ねずみ　ウ ねこ　エ すずめ　オ 牛　カ さる

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合は、「、」や「。」などの記号も一字と数えます。なお、本文中に一部省略したところがあります。

「雑草は踏まれても～」
こんな言葉をよく聞きます。「雑草は踏まれても［　　］」
この空欄には、どんな言葉が入るでしょう。

もしかすると、あなたは、「立ち上がる」という言葉を思いついたかもしれません。
「踏まれても踏まれても立ち上がる」それが、雑草のイメージですよね。
しかし、それは間違いです。
じつは、雑草は踏まれると立ち上がらないのです。「雑草は踏まれても立ち上がらない」これが、本当の雑草魂です。

≪　a　≫一度踏んだくらいなら、立ち上がってくるかもしれません。しかし、何度も踏まれると雑草は立ち上がることはないのです。
何だか、情けないと思うかもしれません。「せっかく雑草のように頑張ろうと思っていたのに」とがっかりしてしまった人もいるかもしれません。
しかし、①そうではありません。
じつは、踏まれたら立ち上がらないことこそが、雑草のすごいところなのです。
雑草は踏まれたら、立ち上がりません。②どうして、立ち上がろうとしないのでしょうか。

考え方を少し変えてみることにしましょう。

≪　b　≫、どうして踏まれたら立ち上がらなければならないのでしょうか？

植物にとって、もっとも大切なことは何でしょうか？

それは花を咲かせて、種を残すことです。

そうだとすれば、踏まれても踏まれても立ち上がろうとするのは、かなり無駄なエネルギーを使っていることになります。そんな余計なことにエネルギーを割くよりも、踏まれながらも花を咲かせることのほうが大切です。踏まれながらも種を残すことにエネルギーを注がなければなりません。

≪　c　≫雑草は、踏まれても踏まれても立ち上がるような無駄なことはしないのです。

踏まれる場所で生きていく上で、一番大切なことは、立ち上がることではありません。踏まれたら立ち上がらなければならないというのは、人間の勝手な思い込みなのです。

≪　d　≫、踏まれっぱなしという訳ではありません。

踏まれて、上に伸びることができなくても、雑草は決してあきらめることはありません。横に伸びたり、茎を短くしたり、地面の下の根を伸ばしたり、なんとかして花を咲かせようとします。もはや、やみくもに立ち上がることなどどうでも良いかのようです。

雑草は花を咲かせて、種を残すという大切なことを忘れはしません。大切なことをあきらめることもありません。だからこそ、どんなに踏まれても、必ず花を咲かせて、種を残すのです。

「踏まれても踏まれても大切なことを見失わない」これこそが、本当の雑草魂なのです。

（中略）

人々が行き交う歩道の隙間に、雑草が生えているのを見かけます。

あるものは茎を横に伸ばしていたり、あるものは大きくなることなく、身を縮ませています。そんな雑草を見て、何だかかわいそうと思ってしまうかもしれません。地べたで暮らす雑草たちを惨めに思ってしまうかもしれません。しかし、本当にそうでしょうか。

確かに他の植物たちが、天に向かって高々と伸びようとしているのと比べると、踏まれている雑草は成長していないように見えます。他の植物が高く高くと縦に伸びているのに、踏まれる場所の雑草は本当に縦に伸びることをあきらめてしまって良いのでしょうか。

植物が上に向かって伸びようとするのには、理由があります。

（中略）

植物が成長をするためには、光を浴びて光合成をしなければなりません。光を浴びるためには、他の植物よりも高い位置に葉をつけなければなりません。もし、他の植物よりも低ければ、他の植物の陰で光合成をしなければならなくなります。有利に光合成をするためには、他の植物よりも少しでも高く伸びなければならないのです。

光を求める植物たちにとって、自分がどれだけ伸びたのかという【　A　】な高さは、じつは重要ではありません。光を浴びるために大切なのは、他の植物よりも、少しでも高く伸びるという【　B　】な高さです。そして、他の植物よりも少しでも上に葉を広げようと上へ上へと伸びるのです。

植物たちはこうして激しい競争を繰り広げています。

踏まれる場所の雑草は、本当にこの③競争に参加しなくても大丈夫なのでしょうか。

もちろん、大丈夫です。

よく踏まれる場所には、上へ上へと伸びようとする植物は生えることができません。上へ伸びても踏まれて折れてしまうからです。

そのため、草高がゼロの横に伸びる雑草も、小さな小さな雑草も、広げた葉っぱいっぱいに太陽の光を存分に浴びています。こんなに光を独占している植物は、他の場所ではなかなか見られません。

（中略）

踏まれる場所に生える雑草にとって、踏まれることはつらいことなのでしょうか？

オオバコの例を見てみることにしましょう。

植物は種子をタンポポのように綿毛で飛ばしたり、ひっつき虫と呼ばれるオナモミやセンダングサのように他の動物にくっつけたりして、広い範囲に散布します。

オオバコはどうでしょうか。

オオバコの種子は水に濡れるとゼリー状の粘着液を出します。そして、靴や動物の足にくっつきやすくするのです。

こうして、オオバコの種子は人や動物の足によって運ばれていきます。車に踏まれれば車のタイヤにくっついて運ばれていきます。

こうなると、オオバコにとって踏まれることは、耐えることでも、克服すべきことでもありません。

踏まれなければ困るほどまでに、踏まれることを利用しているのです。道ばたのオオバコたちは、どれも、みんな踏んでもらいたいと願っているはずです。まさに逆境をプラスに変えているのです。

逆境をプラスに変えるというと、ポジティブシンキングのように、悪いことを良いこととして考えることかと捉えられがちです。

確かにマイナスのことをどのようにプラスに捉えるかは大切です。

しかし、単なる＊レトリックではなく、実際に雑草はより合理的に、より具体的に、④マイナスを確かなプラスに変えているのです。

踏まれた雑草は立ち上がりません。
踏まれた雑草は上にも伸びません。

そもそも、立ち上がらなければならないのでしょうか。
そもそも、上に伸びなければならないのでしょうか。

踏まれて生きる雑草を見ていると、そんなことを教えられます。
上に伸びることしか知らなければ、踏まれたときにポキンと折れてしまいます。
踏まれたままでもいいのです。
伸びる方向は自由です。横に伸びたっていいのです。
そして、本当は伸びなくたっていいのです。
上に伸びることができなくなったとき、横にも伸びることができなくなったとき、雑草はどんな成長をすると思いますか。

そうです。
雑草は下に伸びます。
根を伸ばすのです。
根を伸ばしても、見た目には成長していないように見えるかもしれません。しかし、見えないところで根が成長していきます。
根は植物を支え、水や養分を吸収する大切なものです。

人間も、「根性」や「心根（こころね）」という言葉を使います。
本当は、根っこが大事だと知っているのです。

昔の人たちは、大切に水をやっている野菜や作物が夏の日照りで枯（か）れていくのに、⑤どうして誰（だれ）も水をやらない雑草が青々としているのだろうと不思議がりました。
水をもらっている作物と、誰も水を与えてくれない雑草では、根の張り方が違います。
つらいとき、耐えるとき、雑草はじっと根を伸ばします。
その根っこが、日照りになったときに、力を発揮するのです。

（稲垣栄洋『はずれ者が進化をつくる　生き物をめぐる個性の秘密』筑摩書房）

＊レトリック――ここでは、言い回しのことを指す

問い一、本文中の《　》a～dに入る言葉として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

ア　そもそも　　イ　だから　　ウ　もちろん　　エ　つまり　　オ　確かに

問い二、――線部①「そう」が指している内容として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　雑草は踏まれたら立ち上がらないものである。
イ　雑草は踏まれても立ち上がるものである。
ウ　踏まれても立ち上がらない雑草は情けないものである。
エ　雑草のように頑張れない人間は情けないものである。

問い三、――線部②「どうして、立ち上がろうとしないのでしょうか」とありますが、「雑草」が「立ち上がろうとしない」理由を、五十字以上六十字以内にまとめて答えなさい。

問い四、本文中の【　】A・Bに入る言葉として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。（　）はその語句の説明です。

ア　積極的（進んで物事を行うさま）　イ　現実的（考えや態度などに夢がないさま）
ウ　消極的（いつも受け身であるさま）　エ　相対的（他のものと比べているさま）
オ　理想的（最も望ましいさま）　カ　絶対的（他と関わりのないさま）

問い五、――線部③「競争」とありますが、植物たちの「競争」とは、何のためにどうすることを言いますか。二十五字以上三十五字以内で答えなさい。

問い六、――線部④「マイナスを確かなプラスに変えている」とありますが、どういうことですか。本文中で述べられているオオバコの例に当てはめて答えなさい。

問い七、――線部⑤「どうして誰も水をやらない雑草が青々としているのだろう」とありますが、その理由を三十五字以内で答えなさい。

問い八、この文章における雑草を人間に置きかえた時に読みとれることとして適切なものを次の中から全て選び、記号で答えなさい。

ア　自分がやるべき大切なことを見失わないことが大事である。
イ　それぞれ自分にあったやり方で成長して行けば良い。
ウ　競争に勝てないとわかったときはいさぎよく身を引くことが大切である。
エ　常に向上心を持ってどのような状況であっても高みを目指すことが望ましい。
オ　人に注意をされたことは素直（すなお）に反省し、今後の生き方に役立てるべきである。

四、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合は、「、」や「。」などの記号も一字と数えます。なお、文章中の『』は英語での会話であることを表し、「」は日本語での会話であることを表しています。

十一歳のアオイは、小学校五年生の九月に、父親の仕事の都合でカナダに引っ越しました。カナダの小学校では、担任のミセス・マケンジーが初めに紹介してくれたアディソンと仲良しになりました。ある日、アオイがスーパーマーケットで一人で買い物していると、偶然アディソンと出くわします。しかし、アオイはあることが理由でアディソンからにげてしまいます。次の文章は、アオイを家まで追いかけて来たアディソンが、アオイの部屋に入ったところから始まります。

わたしの部屋に入ると、アディソンは、ベッドの上の読みかけのまんがを見て、

「マンガー！」

と、飛びついた。

『日本のまんがって、絵が全然ちがうよね。すぐに日本のだってわかる』

アディソンが、パラパラとページをめくりながら言った。

『それ、ちがうよ』

アディソンは、裏表紙からめくってまんがを読んでいたから、それをひっくり返して、右から左に読むように、指で示した。

『おもしろーい。日本のものって、全部ちがう』

『カナダのものが全部ちがうんだよ』

アディソンは、もう一度、今度は表紙からパラパラとページをめくったあと、まんがを閉じた。

『①それで、なんでにげたの？』

にげなきゃよかったなあと思ったけど、≪　a　≫仕方がない。お茶を飲んで気持ちを落ち着けたけど、アディソンの顔は見ていられない。

わたしは、天井（てんじょう）を見上げて言った。

『アディソン、いつもなに考えてるのって聞いたでしょ？』

『うん』

『えっと、わたし、いつも「クウソウ」してるの』

「クウソウ？」

空想という単語がわからない。わたしは、お父さんにもらったタブレットで空想を調べて、アディソンに見せた。

fantasy, fancy, vision, daydream, imagination

『わかった。それでどんなこと空想してるの？』

『吹（ふ）きかけたら友達になっちゃうスプレーとか、いやな時間を早送りできるリモコンとか』

『うわあ、それいいねえ』

アディソンは、クッキーを食べながら、楽しそうに話を聞いている。

『でも、それで、なんでにげることになるの？』

『日本の学校で、空想したことを友達に話したら、ばかみたいって言われた』

『えー？　わたしは、ばかみたいとは思わないけどなあ』

『それから、友達に空想したことを話すのはやめたけど、空想することはやめなかった。それで、空想してた時、わたし、笑ってたみたいで、「キモチワルイ」って』

えっと、気持ち悪いってなんて言うのかな。「気持ち悪い」とタブレットにタイプしたら、「creepy」と

出てきた。
『ああ、creepy（クリーピー）ね。なんて言ったかもう一回言ってくれる？』
『クリーピーのこと？　日本語で？　「キモチワルイ」』
『ああ、そう。「キモチワルイ」！』
アディソンは、≪　b　≫言葉を覚えちゃう。
『一人で笑ってて気持ちが悪いからって、みんな、わたしとしゃべらなくなった』
『ブーリードされてたんだね』
ブーリードってなんだろう。　アディソンに、ブーリードとタブレットにタイプしてもらう。
be bullied（いじめられる）
ああ、あれ、いじめられてたのか。さけられてるだけだと思ってた。
『だから、カナダに来てからは、空想しないで、ふつうにしてようと思った』
そう言ったら、②アディソンが、「ぶはっ」てクッキーの粉をふき出した。
『大丈夫（だいじょうぶ）？』
アディソンは、クッキーの粉が変なところに入ったみたいでむせている。
『お茶ちょうだい』
『はい、はい』
アディソンは、お茶でクッキーを流し込（こ）んだ。≪　c　≫、ちょっとゴホゴホしてる。
『食べてる時に変なこと言わないでよ』
『わたし、変なこと言ってない』
『言ったよ。ふつうにしてるって』

★1

『わたし、ふつうだよ』

『全然、ふつうじゃないよ。カナダの学校に通ってるのに、英語がしゃべれないのが、もうふつうじゃないもん』

うわっ。そのとおりだけど、すごいむかつく。

『でも、わたしは日本で育った日本人なんだから、英語はしゃべれない』

『そうだよ。だから、ふつうじゃなくていいじゃない。アオイでいればいいよ。だいたいさあ、ふつうってなに？』

あれ？　なんだ、ふつうじゃなくていいのか。というより、本当に、ふつうってなんだろう。日本でふつうのことが、カナダではふつうじゃないし、カナダでふつうのことが、日本じゃふつうじゃないし。

『ふつうって、わからない』

『たぶん、ふつうなんてないんだよ。あったとしても、ふつうなんてつまんないよ』

そういえば、お母さんも、ふつうなんておもしろくないって言ってたな。

★2

『ねえ、他にはどんなこと空想するの？』

『ミセス・マケンジーは、魔女（まじょ）かもしれないとか』

『えー、なんで魔女なの？』

『ミセス・マケンジーにもらったあめをなめたら、ミセス・マケンジーがなにを言ってるのかわかるようになったから』

『それ、ほんと？』

『半分ほんと。言ってることというより、気持ちがわかる感じがする』

『いいなあ。わたしも、そのあめ、ほしい』
『でも、あめのせいだけじゃないかも。だって、わたし、アディソンの言ってることもわかるもん』
『わたしも、アオイがなにを言ってるのか、だいたいわかるよ。最初の日に、ミセス・マケンジーがわたしを呼んで、アオイに紹介した時に、魔法を使ったのかもね』
『もしそうだったら、「スゴイ」』
『ミセス・マケンジー、「スゴイ」』
アディソンは、Iおどけるように笑った。
『アディソン、どうもありがとうね』
『なにが？』
『この間、学校で泣いた時に手をつないでくれて』
『当たり前でしょ。わたしたち、友達だよ』

★3

そうか。わたしとアディソンは、友達なんだ。わたしに友達ができたのも、ミセス・マケンジーの魔法なのかな。ミセス・マケンジーは、わたしとアディソンが友達になるってことをII見越して、わたしにアディソンを紹介したのかもしれない。
アディソンは、クッキーを食べ終わると、またまんがをパラパラめくり始めた。それから、急に、
『ねえ、一緒にまんがをかこうよ』
と言った。
『まんがをかくの？』
『うん、アオイがお話を考えて、わたしが絵をかくの』
『わたし、お話なんて考えられない』

『なんで？　いつもおもしろいこと考えてるじゃん』
『そうだけど』
『アオイを主人公にしてお話を作ったら？　たとえば、そうだな、アオイがカナダに来るんじゃなくて、ちがう世界に行っちゃうのはどう？　*パラレルワールドとか』
『それ、いいね。それで、わたしの世界ではふつうのことが、その世界では、マジックアイテムになるの。チョコレートを食べたら、そこの人の言葉がわかるようになるとか』
『そう、そう。そんな感じ。ねえ、アオイ、なんか、書くものある？』
わたしは、落書き用のノートとえんぴつをアディソンにわたした。
『これが主人公ね』
アディソンが主人公の絵をかく。やっぱりアディソンは、絵が上手だなあ。でも、なんか、丸い顔に丸い鼻で、あんまりかわいくない。
『それ、わたし？』
『うん、アオイが主人公だからね』
『もうちょっと、かわいくかいてほしい』
『そう？　かわいいと思うけど』
アディソンは、そのキャラクターの絵の下に Aoi と書いた。
『えー、名前もわたしの名前なの？』
『うん。いや？』
『ちょっと恥ずかしい』
『じゃあ、どんな名前がいい？』
そう聞かれると、すっと他の名前が出てこない。《　d　》考えていたけど、アディソンは、待ちきれ

なくなったみたい。
『じゃあ、とりあえずは、アオイで、あとでいい名前が思い浮かんだら、その名前にしよう。タイトルは、どうしようか』
「『あおいの世界』なんて、いいかもなあ」
思わず日本語でつぶやいた。
『アオイノセカイってどういう意味？』
『えっとね、アオイズ・ワールド』
『それいいね。それで、どうしてアオイは、パラレルワールドに行ったことにする？』
アディソンが、アオイの絵をかきながら聞いた。
『パラレルワールドじゃなくて、アオイの空想の世界に行くっていうのは？　アオイズ・ワールドだから。アオイは、いやなこととか、つらいこととかあると、空想するくせがあるの。それで、空想の世界に行ったまま帰ってこられなくなる』
『おもしろいかも。じゃあ、きっかけになったつらいことはなに？』
『いじめられる』
『でもさあ、いじめられたあとに空想の世界に行っちゃったら、帰ってきたくないんじゃない？　最後は、やっぱりこの世界に帰ってくるようにしたいよ』
『じゃあ、勉強がいやだとか』
『勉強、そんなにいやかなあ？』
そうだった。カナダの学校は毎日がパーティーみたいだし、宿題もないんだった。
『じゃあ、お母さんの作るごはんがいやだとか』
『アオイ、お母さんの作るごはん、いやなの？』

『ううん、お父さんの作るごはんがちょっとね。お母さんがけがをしてから、お父さんが料理をするようになったんだけど、*ラムチョップのなんとかみたいな、凝ったものばっかり作るんだよ。わたしは、ふつうのごはんが食べたいのにさ』

『ふつうのごはんね』

アディソンと顔を見合わせて笑う。だれかと一緒に、こうやって笑うのって、久しぶりのような気がする。

「ただいま」

お父さんが帰ってきた。時計を見たら五時だった。お米を研ぐの忘れてた。

『ごめん、アディソン。わたし、晩ごはんを作る手伝いしなくちゃいけないんだ。また、今度話そう』

『うん』

部屋を出ると、ちょうど服を着替えに二階に上がってきたお父さんに会った。

お父さんがⅢ会釈をして言った。

『こんにちは』

『こんにちは』

アディソンも会釈をして言ったのがおかしかった。

「同じクラスのアディソンだよ。ごめんね、今、お米研ぐから」

「友達が来てるんなら、べつにいいよ。お父さんがやるから」

わたしは、アディソンをちらっと見た。

『もう少しいる？』

『ううん。わたしも帰ってごはんを作らなくちゃいけないんだ』

『アディソンもごはん作るの？』

『うん。お母さん、いつも七時ごろに帰ってくるから、晩ごはんは、わたしが作ってるの』
「すごいね」
『でも、パスタだよ。そんなに難しいものは作らないから』
アディソンは、トマトの缶づめを顔の横にくっつけて笑った。
『じゃあね、また明日』
『うん、またね』
思いがけず、アディソンと仲良くなれた。やっぱり十一月には、なにかいいことが起こるんだな。
アディソンが帰ると、すぐにお米を研ぎにキッチンに行った。お父さんが、玉ねぎをくし形に切ってる。
「今日の晩ごはんはなに？」
「肉じゃが」
よかった。今日のメニューは［　X　］だ。

（花里真希『あおいの世界』講談社）

＊パラレルワールド――現実と平行して存在すると考えられている別の世界のこと
＊ラムチョップ――子羊の骨付き肉

問い一、《　》a～dに入る語句として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。
ア　しばらく　　イ　いまさら　　ウ　ようやく　　エ　まだ　　オ　すぐに
問い二、═══線部Ⅰ「おどけるように」・Ⅱ「見越して」・Ⅲ「会釈をして」のここでの意味として最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「おどけるように」

ア　アオイを見下して、ちょっとばかにしたように
イ　アオイをかわいそうに思って、同情するように
ウ　アオイを立ちなおらせようと、はげますように
エ　アオイを笑わせようと、わざとふざけるように

Ⅱ「見越して」

ア　予測して
イ　期待して
ウ　応援(おうえん)して
エ　熱望して

Ⅲ「会釈をして」

ア　そっと手を差し出して
イ　優しくほほ笑(え)んで
ウ　軽く頭を下げて
エ　ちらっと相手を見て

問い三、――線部①「それで、なんでにげたの？」とありますが、アオイはなぜにげたのですか。三十字以内で答えなさい。

問い四、――線部②「アディソンが、『ぶはっ』てクッキーの粉をふき出した」とありますが、この時のアディソンの気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　アオイが日本にいたころにいじめられていたことを聞いて怒っている。
イ　アオイが全く予想もしなかったことを急に言ったことに驚いている。
ウ　アオイが毎日空想していることを知っておかしく思っている。
エ　アオイが急に打ち明け話を始めたことにあせりを感じている。

問い五、★1「『わたし、ふつうだよ』」から★2の直前「そういえば、お母さんも、ふつうなんておもしろくないって言ってたな。」までの間で述べられている「ふつう」とはどのようなものですか。適切なものを次の中から全て選び、記号で答えなさい。

ア　人々の中で友好的にふるまうこと　　イ　どこでも通用する当たり前のこと
ウ　特別な才能がないこと　　エ　周りの人と同じであること
オ　相手の文化に歩みよること

問い六、★2「『ねえ、他にはどんなこと空想するの？』」から★3の直前「『当たり前でしょ。わたしたち、友達だよ』」までのアオイとアディソンの二人のやり取りから分かることを説明したものとして、適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　アディソンは疑問を繰（く）り返し差しはさむことで、アオイの話が真実であるかを確かめようとしていることが分かる。
イ　アディソンがなじみのないはずの日本語でアオイの言葉を繰り返していることから、アオイに対して共感をもっていることが分かる。
ウ　アディソンはアオイの空想をただ聞くだけでなく、自分自身もその空想の世界をアオイと共に楽しもうとしていることが分かる。
エ　アオイはアディソンとの楽しい会話を通して、まだ言っていなかったお礼を素直（すなお）に言うことができるようになったことが分かる。

問い七、以下の(1)〜(5)のそれぞれについて、本文の表現や内容に合っていれば○を、合っていなければ×を書きなさい。

(1)　会話文以外でも、アオイが心の中で思ったことを読み取ることができる。
(2)　アディソンとの会話を通して、アオイは空想をやめ現実に向き合っていこうと決めた。
(3)　アオイはアディソンとは共通点が少ないので、分かり合えないと思っている。
(4)　本文中に挙げられたアオイが空想するアイテムは、どれも自分を助けてくれるものである。
(5)　アディソンはアオイを主人公とした物語を書こうと、出会った時から計画していた。

問い八、本文中の［　　］Xに当てはまる一語を本文中からぬき出して答えなさい。ただし、具体的な料理名は入りません。

問い九、この文章では、アディソンとの会話を通してアオイの考え方が変わっています。このように、他者との関わりを通して考え方が変わった体験をあなたの日常生活から一つ紹介しなさい。